

## 1 幼少期

秀島由己男（本名：秀嶋幸雄）は、不知火海に面した水俣町（現水俣市）大園（ウゾン）に昭和9年（1934）父榮太郎、母ワカの長男として生まれた。2月に生まれたにもかかわらず虚弱な体であったため、医者判断で出生届の提出は4月15日になった。

大園一帯の人々は貧しく、出稼ぎ者も多かった。由己男の幼い頃、破れた魚籠や貝を集めたり、ままごと遊びや好きな絵をかいたりした。

大園は後に埋め立てられたが、その広場に毎年サーカスの小屋が立った。由己男はそれが楽しみで、「サーカスについて行きたいと思った。」と述懐している（『暗河』二号）。

母は夜遅くまで、毎日裁縫で忙しかった。由己男は母と一緒に寝た覚えがない。折り紙で鶴・船・袴・風船などを折ってくれた思い出を、後に「追憶の宝の蔵」と例えている。

## 2 父母との別れ

姉とは13歳違いで幼い頃は姉を天使のように思っていた。ただ、由己男は姉と遊んだ記憶がない。姉は松尾最と結婚して家を離れていたが、ある日、大園の家に夫婦で帰ってきた。狭い家は窮屈になり由己男の家族は溪流を遡った榎谷の小屋に引っ越した。

病弱な父は鍛冶屋や灸マッサージ、行商をして働いたが、それでも生活は貧しかった。父の楽しみの一つはメジロを飼うことであった。由己男は父に添い寝してもらい、父の作った即興の話を聞くのが好きだった。

榎谷の小屋に行く途中に溪流を渡る丸木を架けた一本橋があった。ある時、父はこの橋で足を滑らせ胸を強打した。金がなく病院にも行けず家で看病していたが、持病の結核もあり一月後の昭和28年（1953）2月24日に亡くなった。由己男は納棺時、体を拭きながら「こんなにも痩せていたのか」と胸が抉られる思いがした。

父の死後、水俣市旭町の従兄の家に引っ越した。母の妹の家で叔母と遺児たちが住んでいた。

遺児の長男は 30 歳の子持ちで、賑やかな家族であった。

由己男は母と二人でこの家の 2 階に住んだ。親子水入らずの生活は幸せな日々であった。ただ、父の病が伝染したようで肺結核で入院を余儀なくされた。

入院中、母の従兄姉妹の女性が熊本の段山から来て、居候していた。ある日、母は煮えたぎる味噌汁の鍋を持って急な 2 階への階段を踏み外し、下半身に大やけどを負った。母は病院にも行かず 2 階で静かに寝ていたが、一階に住む叔父の次女が看護婦で、薬を貰い手当をした。

病院を抜け出して母を見舞ったが、母は安心するよう諭して病院へ帰した。母は心臓が悪く結核も罹っており、火傷のショックが重なり昭和 30 年（1955）2 月 5 日、亡くなった。医者の診断は心臓麻痺であった。由己男は母の死を知り、病院の大部屋で、周りに悟られないよう布団のなかで嗚咽した。

### 3 石牟礼道子との出会い

由己男は水俣市立第一中学校を昭和 25 年（1950）3 月に卒業し、水俣市内の映画館の看板描きの募集に絵が描けるのならと応募し、採用された。しかし実際の仕事は掃除、ビラ貼り、チンドン屋などで、退職するまでの 7 ヶ月半、一度も絵筆を握ることはなかった。次に米屋に住み込みで働いたが、華奢な体で米俵を担ぐことが苦手で、1 週間でクビになった。

働き口のないまま絵の勉強をしたくて水俣一中の長野勇先生の水彩画の塾に通った。石牟礼道子も息子を背負って来ていた。話しかけたが石牟礼からの返事はなかった。（『暗河』2号）。

由己男が水俣市立病院に入院していた時、病棟で短歌会があり、由己男も短歌を詠んだ。石牟礼は短歌の指導者として現れ、会話する機会を得た。これが縁で退院後は三日とあけず石牟礼家を訪ねては、食事をごちそうになった。

石牟礼は後に「有り合わせの残り物」と笑いながら回想している。

### 4 事務補助員の頃

昭和 25 年（1950）11 月、長野先生から事務補助員（用務員）を紹介され喜んで仕事に就いた。暇なときは職員室の片隅で小さな紙片にペンで画を描いた。

用務員室の隣に音楽室があり、由己男はよく黒人霊歌や日本の歌などのレコードをよく聞いた。黒人霊歌は地の底からわき上がり訴えてくるようで、由己男の心に深く沁み込み、やがて自伝的記憶となった。この体験が、後の「霊歌」シリーズの作品に繋がった。

由己男は、昭和 31 年（1956）水俣の旭町より陣内へ転居した。

## 5 浜田知明へ師事

昭和 28 年（1953）6 月、第 1 回熊本県水彩画展に「静物」を出品しグランプリを受賞する。由己男 19 歳で、非凡な才能の片鱗をみせ始める。

同年、新日本窒素工場で開かれた海老原美術展を観た由己男は、抽象画に魅せられ、画風は具象画から抽象画へと変化する。ペンとインクと定規を使い、細い線で、何本も気の遠くなるように線を引き、あるいは重ねて濃淡を表した。一方、水彩画を描くときは、柔らかい筆致で水俣の山野や海に見える景色を描いた。

昭和 29 年（1954）9 月、第 9 回熊本県美術協会展に水彩画「牽牛と織女」で M 氏賞を受賞。以後も S 氏賞受賞や多くの入選を果たしている。

昭和 30 年（1955）頃、新日本窒素工場内に絵画部が設置され、由己男も参加した。海老原喜之助美術研究所（エビ研）から講師として派遣された内尾雅恵は、由己男のペン画を見てエビ研の境野一之を紹介し、境野が「君のペン画は銅版画に近い」と浜田知明に直接電話した。

浜田によれば、昭和 32 年（1957）の春、境野から「県展に出品している秀島君という実に熱心な青年がいて、一人でこつこつペン画を描き続けているが、適当な指導者がいないので、よかったら見てくれないか」と懇願されたという。

これを機に熊本市紺屋町の浜田家に年に数回、水俣から額装したペン画を持参した。

浜田は絵を眺めて時に「これはいいね」と呟いたり黙って絵を見つめたりした。このようなことが 10 年ほど続いた。

## 6 博多人形と蠟燭

幾何学的な図像が昭和 37 年（1962）に入って、口をあぐり開けた図像「霊歌〈仮面〉A」

へと変化する。由己男は 10 cmにも満たない素朴な博多人形に惹かれ、この人形をモデルにペン画や銅版画などを制作した。

「黒人霊歌の響きが博多人形の形を借り、それを自分の形にして、そして私の霊歌になった。」と語る。

また、「蠟燭を持つ人物」が「口を開けた人物」の少し後から登場する。平成 29 年（2017）福島県立美術館で開催の『秀島由己男展』の図録に掲載されたインタビューで「蠟燭というのは、不思議な世界を作り出します。今も昔も闇の中を照らし出しますね。心理的に深い表現になります。祈りの状態。もう一つの世界への橋渡しとしての役目もあると思います。この世からあの世に通じる一つの灯りですね。」と語る。蠟燭の灯りに対して影が生じ、「影というのは、物体を想起させます。特殊な影を描いたら、普通の状態の物体ではなく、その人のイメージを通じて物体が浮かんでくると思うのです。そのための影の役割があるのではないかな。」と述べている。

## 7 犬童家に居候

昭和 39 年（1964）恩師犬童雄太郎の転勤にともない「うちに来ないか」と誘われ、中学校の事務補助員の職を辞し熊本市九品寺の犬童家の 2 階に住むこととなった。仕事もないので、ひたすら好きな絵を描いて過ごした。

昭和 40 年（1965）犬童は校長になり熊本市高平に新築家屋に移った。由己男もそのまま高平の犬童家の 2 階に移った。2 階は、居間兼アトリエとした。

後に犬童雄太郎・静江夫妻を「父とも母とも呼ぶべき」存在であり、人生の恩人と語っている。

## 8 土方定一との出会い

昭和 40 年（1965）第 20 回熊日総合美術展にペン画の「祖霊の国」「霊歌：月」「霊歌：刑」を出品し、熊日賞を受賞した。

「祖霊の国」について「この世のもでもない、あの世のものでもない、もう一つの世界と行き来するといったらいいでしょうか。それで自然に『祖霊の国』というタイトルになった」という。

受賞により、由己男は「急に運が開けてきた」と回顧する。審査員は熊日文化部長の松下博、

海老原喜之助、土方定一であった。土方定一は神奈川県立近代美術館長であり、後に受賞作品の3点が収蔵されることになる。

海老原は、由己男を東京京橋にある南天子画廊に紹介した。これが縁で、昭和41年（1966）3月28日から4月9日まで「第一回秀島由己男展—ペンに依る黒の歌—」が開かれ、連作「霊歌」14点をはじめ、22点の出品である。売れ行きも上々で、翌年も9月23日から11月4日まで、東京の南天子画廊で「第2回秀島由己男展—ペンに依る黒の歌—」が開かれた。販売の価格も値が上がり、会期後、画廊から50万円を受け取った。生まれて初めて手にした大金であった。

石牟礼の11月30日の日記に「秀島さんの東京での個展、成功のもよう。1点8万円に値をつけられたとのこと。よかった。」とある。さらに「秀島さん額縁を作って売って500万円貯め、フランスにゆくという。2年計画、彼のことだから、きつとうまくゆくにちがいない。道子同道の予定なりという。」と記している。

## 9 ペン画から銅版画制作へ

昭和42年（1967）浜田知明は転居を機に、電動のエッチングプレス機を購入し、古いエッチングプレス機を無償で由己男に譲った。世界的な名声を博した銅版画家の長谷川潔、浜口陽三、ジャック・カロ、フランシスコ・ゴヤなどの作品を買い求め、版画の技法を研究している。この頃「長谷川や浜口を超える作品を作る」との思いを、地元の画廊に告白している。

昭和44年（1969）本格的に銅版画の制作を開始。作品は、手元に1枚あれば良いので、欲しい人があれば渡していた。この年、9点の銅版画作品を制作し、納得いかない6点にはペンで加筆した。

技法はエッチング、メゾチント、アクアチント。独学で短期間での技法習得に由己男の執念がみられる。

主な作品集として昭和46年（1971）に、土方定一童話集『カレバラス国に名高きかの物語』が歷程社から刊行され、浜田の銅版画3点と由己男の銅版画4点が収録された。

昭和47年（1972）に『詩画集 わらべ唄』（6点）、昭和48年（1973）に『詩画集 彼岸花』（8点）が、南天子画廊から刊行され、いずれも石牟礼の詩に由己男が版画を制作したもの

である。

ところで、浜田は美術雑誌『求美』21号（昭和49年10月刊）に「秀島由己男の人と作品」を掲載している。このなかで、「秀島さんは今40才。生きることは描くことであって、そのためには妻帯をも避けて今だに独身である。」として、妻帯を薦めている。由己男は笑って答えることはなかった。

昭和50年（1975）フィンランド美術館主催の第1回ユベスキュラ「グラフィカ・クリエイティヴァ国際版画トリエンナーレ」に『詩画集 わらべ唄』から5点を出品し、ディプロマ賞を受賞した。

昭和52年（1977）8月、歌人安永露子の歌集『蝶紋』に2点の銅版画による挿絵を作成する。安永は白い服を着こなし、一際目を惹いた。由己男は好感を抱いた。安永は、後の熊本県教育委員会の教育長にもなられた美目秀麗な才女として、知られた人物であった。

昭和53年（1978）には、石牟礼の「にゃあま」の連載が始まり、ペン画で21点の挿絵を描いた。

## 10 自画像「風の船A」

昭和56年（1981）由己男の自画像とされる「風の船A」が制作される。人間関係に幻のような儚さを感じて生まれた作品という。「人と人とは上半身風船となって、向き合うこともなく、すれちがって闇の中へ消えてゆく。この版画の中に私の人生のテーマがあるような気がする」。また「あんなに優しく温かそうにしている雲でさえ、結局すれ合うだけで、本当に結びつくこともなく互いに去ってゆく。人間同士もまた、それと似たようなものでは・・・」と述べた。

由己男のこのような独白は、多くの人に囲まれ助けられながらも、両親を早く亡くした孤独感に襲われた過去とは、無縁ではないであろう。

## 11 東京生活

昭和59年（1984）南天子画廊社長の青木治男から東京に来るよう誘いがあった。浜田知明は「一度行ってみるがいい」と勧めたが、石牟礼は「東京なんか行くぐらいなら、首をくくって死

んだがましよ」と諭した。

東京では、新宿区下落合にあった故瀧口修造邸に移り住んだ。瀧口は近代日本を代表する美術評論家として知られた人物である。屋敷はおしゃれな家で、勿体ない環境であった。

東京暮らしの一番の収穫は、詩人高橋睦郎との出会いであろう。同氏は由己男に風貌が似ていると言われ、絵も好きで、思考も似ているに違いないと思い、直接電話をした過去がある。その後、電話や手紙のやり取りが続き、やがて同居することになった。

そのうち、一緒に作品集を作る計画を立て、昭和 60 年（1985）『詩画集 静物考』6 点の版画を南天子画廊から刊行した。

高橋との共作は、平成元年（1989）に版画集『舊約聖書〈詩篇〉より』6 点がある。

## 12 熊本での活動

もともと体の弱い由己男は、東京の空気で気管支を悪くし、医者に森林浴を勧められた。関東で住める場所を探したが、冬場の寒さが厳しく、熊本に帰ることにした。帰るに当たり、水俣ではなく温泉のある山鹿市下吉田へ越した。

昭和 62 年（1987）のヨーロッパ旅行では、ベルギーのアントワープの建物の素晴らしさに目を奪われた。さらに、美術館の庭にヒッチコック像があり、思わずカメラのシャッターを切った。平成元年（1989）撮影した写真をもとに『詩画集 われらにさきかけてきたりしもの』を制作。アントワープの街並みと恐怖映画で知られるヒッチコックの「鳥」をモチーフにした 7 点からなる作品群で、扉絵にヒッチコック像を描いた。建物には、だまし絵風に多くの鳥を描き入れた。

昭和 63 年（1988）広島県で新たに美術館が造られることになり、由己男に作品の依頼が来た。この際、制作された作品が「霊歌〈ヒロシマ A〉」である。口を開けた顔を並べて背景にし、原爆ドームを描いた。原爆ドームの中央にドクロを一つ描きこんだ。

この時、浜田も依頼に応じて「ボタン A」を制作している。

平成 3 年（1991）熊本日日新聞のインタビューに「私にとって、黒こそすべてをあらわす色なのだ。どんな色より、黒ほど奥深く、精神性に溢れ、かぐわしく高貴な色はないと思っている。」と語った。

一方で平成 29 年（2017）に福島県立美術館で開催された折、学芸員の質問に対し「モノクロを描いたら、生理的にカラーを要求するのです。真っ黒で闇を描いたら、次はやはり、白昼夢とまではいかないけれど昼の光に照らし出された物体を描きたいという自然な要求です。」と答えている。さらに「モノクロをやっていたら、自然な状態で体がカラーを要求する。そう要求した時に描く。それから、銅版は力があるのです。この頃は関節が痛いので、カラーは力がいらなくていい。」と答えている。

平成 4 年（1992）1 月、終の棲家となる玉名郡三加和町大字津田（和水町津田）に引越す。2 匹の犬との散歩を日課にし、油彩画などを手掛けた。

### 13 「風の船」の連載

平成 6 年（1994）熊本日日新聞朝刊に「風の船」と題して、月一度のペースで連載された。謎の多い作家の秘密がここに明らかになり、貴重な連載となった。

また、連載の挿絵として 12 点の版画を制作し、そのうちの 6 点は、人物像である。その人物は、母親、石牟礼、海老原、犬童雄太、福島次郎、黒木芳雄、芹川光行の各氏であった。

### 14 魂の詩—秀島由己男展

熊本県立美術館で初期の水彩画やペン画をはじめ、銅版画など画業の全体が分かる『魂の詩—秀島由己男展』が平成 12 年（2000）9 月 14 日から 10 月 29 日の期間で開催された。

図録で目につくのは「口を開けた人物」や蠟燭、仮面、影、貝であり、これらは「この世のものでもない、あの世だけのものでもない、もう一つの世界」へ入るためのアイテムであることに気付かされる。由己男にとってこれらは「宝の蔵」であり創作の原動力であった。

### 15 『春の城』の挿絵

平成 9 年（1997）熊本日日新聞朝刊に石牟礼の『春の城』の連載が始まった。『春の城』は、石牟礼の弱きものに寄り添う形で「天草・島原の乱」をテーマにした物語である。由己男はその挿絵を担当し、天草・島原方面への取材を行なった。

扉絵は、傑作とされる。雲の割れ目から海へと光の筋が差し込み、光の中に十字架を浮かび上がらせている。おそらく取材時に偶然このような風景を見て、シャッターを切ったのであろう。

『春の城』は扉絵を除く 312 点に及ぶ版面が作られた。多くはフォトグラヴィール、エッチングによる技法である。船山古墳のそばの民家園の藁屋根の民家、三加和町の塀や門、人物が登場する。なかでも石牟礼は、何度も登場している。

## 16 石牟礼道子著作本の装丁

昭和 43 年（1973）石牟礼道子編『天の病む』が筑摩書房から刊行され、装丁に由己男の銅版画『詩画集 わらべ唄』の「風景」が使用された。由己男と石牟礼とのコラボは全体で 12 回に及ぶ。以下、列記したい。

昭和 43 年（1973）『流民の都』大和書房、装丁「霊歌（祖霊の国）B」

昭和 43 年（1973）『天の魚』筑摩書房、装丁『詩画集 彼岸花』の「出魂」

昭和 51 年（1976）『潮の目録』葦書房、装丁「彼岸花」

昭和 51 年（1976）『椿の海の記』朝日新聞社、装丁『詩画集 彼岸花』の「月夜」

昭和 52 年（1977）『草のことづて』筑摩書房、装丁「草原の雁」

昭和 53 年（1978）『流民の都』（再版）大和書房、装丁『詩画集 彼岸花』の「少年」

昭和 51 年（1976）『天湖』毎日新聞社、装丁「樹海〈鳥〉A」

昭和 61 年（1986）『陽のかなしみ』朝日新聞社、装丁『詩画集 静物考』の「sheii」

平成 2 年（1990）『アニマの鳥』筑摩書房、装丁『春の城』の「死と復活 - XII」

平成 12 年（2000）『潮の呼ぶ声』毎日新聞社、装丁『春の城』の「207」

平成 29 年（2017）完本『春の城』藤原書房、装丁『春の城』の「扉絵」

また昭和 61 年（1986）大庭みな子著『醒めて見る夢』の装丁は『詩画集 わらべ唄』の「樹」が使用されている。

## 17 おわりに

平成 30 年（2018）10 月 3 日、84 歳で死去。

死後、自宅を訪ねた折、仏壇に小さな額をみつけた。それは、母と由己男が並んで映った小学校入学記念の写真であった。由己男は希望に満ち、幸せそのものである。